

## 多発転移を伴って発見された 外陰 Paget 病の 1 例

かわ ぐち わか え さ とう せい や  
川 口 稚 恵 佐 藤 誠 也  
みず た まさ よし  
水 田 正 能

キーワード：外陰 Paget 病，腺癌並存型，多発転移，FECOM 療法

### 要 旨

外陰 Paget 病は，長期間上皮内癌の状態であり，その予後は良好とされている。しかしながら，進行例は治療に抵抗性で予後不良である。本症例は多発転移を伴っていたため，全身化学療法を行った。しかしながら，その効果は十分でなく，脳転移巣からの出血により永眠された。進行例には，全身の検索と慎重な管理が必要であると考えられた。今後，新たな治療法の確立が望まれる。

### はじめに

外陰 Paget 病は，外陰部悪性腫瘍の約 2% を占める稀な疾患である<sup>1)</sup>。60 歳以上に好発し，多くは掻痒感・灼熱感を主訴とする。外陰皮膚の基底層あるいは汗腺などから発生し，長期間にわたり上皮内癌の状態のため，予後は良好とされている。しかしながら，症状が非特異的で気付きにくいため，初診が多く患者で遅れがちとなり，長い場合は 2 年近く放置された症例もある。その際に，浸潤や転移があった症例は予後不良となることが多い。今回，多発転移を伴って発見され，予後不良であった外陰 Paget 病の 1 症例を経験し

たので，その治療法を中心に文献的考察を加えて報告する。

### 症 例

患者：77 歳 2 経妊 2 経産

既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：2 年前から右外陰部掻痒感および腫瘤感を自覚していたが，放置していた。左膝化膿性関節炎のため当院整形外科に入院中，外陰部腫瘍を指摘され，当科紹介となった。初診時所見では，右外陰部から右大腿内側に及ぶ 6 × 3 cm の不正形赤色腫瘍を認めた。腫瘍は境界明瞭で，表面は浸潤しており，一部に潰瘍を形成していた。左鼠径リンパ節が小指頭大に腫大していた。腔鏡診では腔壁および子宮腔部には病変はなかった (Fig. 1)。生検病理組織検査では，表皮深層に大きく明

Wakae KAWAGUCHI et al.

益田赤十字病院産婦人科

連絡先：〒698-8501 島根県益田市乙吉町イ103-1